

erudio11

国立大学法人 岩手大学 大学教育総合センター通信 2009.12

Iwate University : **U**niversity **E**ducation **C**enter

Contents

ごあいさつ	02
部門長より	03
運営委員会	05
環境人材育成プロジェクト	06
入試部門	07
全学共通教育企画・実施部門	08
教育評価・改善部門	10
専門教育関係連絡調整部門	12
学生生活支援部門	13
キャリア支援部門	14
全学共通教育授業実施報告	15
いわて高等教育コンソーシアム	16
アイアシスタント&匠の技	17
委員会及部門会議名簿	18

センター長より

たま しんのすけ
玉 真之介

■アイアシスタントの薦め

200人超の大人数クラスの解消は、全学共通教育の1つの課題です。しかし、大人数クラスでは良い授業はできないというのは間違いです。アメリカでは、シアター型と呼んで、エンターテインメント並に500人、600人クラスの充実に力を入れています。

そこで私も「知的財産入門」のコーディネーターを担当して大人数クラスを体験していました。3名の弁理士、1人の弁護士という豪華な非常勤講師によるオムニバス授業です。受講生は223名。その結果、アイアシスタントのiカードやドリルがきわめて有効であることが分かりました。

以下は、最終回のレスポンスカードです。

「この授業ではアイアシスタントがよく活用され、情報公開も盛んに行われていてとても良いと思いました。おかげで、他の一般教科目よりも授業内容がよく身に付きました。(人社・1年)」。「授業ではクリッカーなどを使って楽しく学ぶことができ、とても充実して良い授業になったと思う。(教育・1年)」。「授業中だけではなかなか理解するのが難しく、課題やドリルは大変だった。しかし、自分で理解を深めるために調べたり考えたりできたので自分のためには良かったと思う。(教育・1年)」。「講義内容が難しく、正直ついていけないなど感じる日もありましたが、iカードや課題などによるサポートのおかげで何とか最後まで受けることができました。(工・1年)」。「アイアシスタントのiカードは考えさせる問題であったために講義の復習になってより理解度が深まりました。そしてドリルの問題は簡単な問題でしたが覚えたことの確認としては最適でしたので助かりました。(工・1年)」。「またアイアシスタントのドリルでは解いたあとに友達と何点だったか教えあい、その後に問について一緒に考えたのはより権利についての理解を深めることができました。(工・1年)」。「また、その知識をもとにアイアシスタントの中でiカードや課題をこなしていくことで様々な具体例に対応していく力をつけることができたと思う。(工・1年)」。

学生の拍手で授業が終了したのも印象的でした。

副センター長より

さとう りゅう
佐藤 潤 大学教育総合センター 副センター長
(全学共通教育企画・実施部門長)
(教授 工学部専任担当)

■初年次教育の充実のために —初年次自由ゼミナールの開設—

大学に入学した学生が、さて、何を学ぶか、どのような生き方をすべきか。多くの学生がこの手掛かりを得ようとはしているけれども、大学入学の目的が必ずしも明確ではない学生もいます。本学に入学する多数の学生が入学後に新たな人生に目覚め、学問に目覚め、それぞれの生き方をよい方向に変えることになるならば願ってもないことです。

しかし、惰性のまま大学生活を始めてしまい、時には社会から隔離した生活に陥ったり、思わぬ方向へ足を踏み入れてしまったり、生き方を誤る場合もあります。そのような学生の多くは高校での授業における学び方と、大学における学びの違いを認識できず、その結果として大学の授業内容を理解できず挫折するのでしょうか。

大学における学びを支援しようと、設けられたのが、転換教育科目です。しかし、本学ではこれまで転換教育科目としては各学部が実施してきた「基礎ゼミナール」1科目だけでした。いろいろの学生に対応する転換教育科目としては不十分と言わざるを得ません。そこで、一昨年、転換教育科目の拡充を目的として「初年次自由ゼミナール」(発展ゼミナールとして提案)の開設を提案してきました。さまざまな議論の結果、このほど22年度後期に開講することが全学的に了承されました。

この新しいタイプの科目が、本学の学生にとって、入学後の意欲的な学びの姿勢に結びつくきっかけとなるならば、この科目の新設の意義は極めて大きいものとなります。「初年次自由ゼミナール」の効果に期待しましょう。



ごとう なおと
後藤 尚人教育評価・改善部門長
(教授 人文社会科学部専任担当)

教育評価・改善部門の主要業務(教育支援活動、FD活動、センター通信や年次報告の編集・発行、アイアシスタントの管理・運営)は、専任教員の献身的な働きにより順調に進んでいます。

ですが、昨年度発足した「いわて高等教育コンソーシアム」(文部科学省平成20年度戦略的大学連携支援事業採択事業)の本格稼働に加えて、「いわて未来づくり機構」(岩手県各界の連合体:平成20年4月発足)の地域力を支える人材育成作業部会にもかかわることとなり、少々首が回りにくくなってきました...

とはいえ、今年が2年目になる「教授技術『匠の技』伝承プロジェクト」のコンテンツ作りも待ったなしの状況です。匠の授業撮影は何とかこなしていますが、編集作業が追いついていません...

にもかかわらず、9月にはITCの教育面での活用状況を探るため、フランスへ2週間ばかり出張してきました。ナント大学、アンジェ・カトリック大学、アンジェ大学、リヨン・カトリック大学、リヨン第3大学、パリ第3大学、パリの極東研究院と、7大学・研究機関を回ってきました。文部科学省に採択されたプロジェクト経費(匠の技プロジェクト)での出張であることや、人文社会科学部のグラ先生にアポ取り等をお願いしたこともあり、訪問先々で歓待を受け、国内調査に見られるような2~3時間の聞き取りで一件落着とはならず、ほとんどの訪問先で昼食を挟み半日以上を費やして、複数の担当者(リヨン第3大学は朝9時から5時過ぎまで総勢12名)からじっくりお話を伺うことができました。

フランスでの調査内容は後日報告書にまとめますが、同行したグラ先生&江本先生とともに、連日のフランス料理+ワインで、出発前と帰国後の体重落差がいまだに解消されていないと思われます。いずれ仕事に追われ日々の中で元に戻りそうですが...

むら かみ たすく
村上 祐専門教育関係連絡調整部門長
(教授 教育学部専任担当)

本部門の任務に関連して、工学部・農学部のここ数年の「専門基礎科目」の開講数を調べてみました。どちらも年度ごとに漸減しており、特に工学部では2006→09年度で、数学:28→21、物理学:20→17、化学:16→11と激減しています(学科統合等の影響もあるようです)。農学部のある調査によれば、「クラスサイズは授業に負の影響を与える」とのことです。「大学教育の質を確保し、国際的に通用する学士とする」(中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」2008年12月)のためにも、適正なクラスサイズでの適正な開講数を維持する必要があると思います。また、工・農の入学生を対象にした数学・物理学・化学の習熟度調査により、入試形態によってやや大きな差がある、入試科目でないと習熟度が低いなどの傾向が見られました。履修歴・基礎学力の異なる学生に対するきめ細かな教育も大きな課題です。

学内では学長提案を受けて「第二期全学改革」を検討中ですが、教育・研究組織がどのような姿になっても、理系の専門をめざす学生にとって専門基礎教育の重要性が変わることはありません。改革に際しては、その基礎教育を担い、上述の問題にも対処できる十分な教員体制を整備することが求められます。

話題が変わりますが、今年度基礎ゼミを担当しました。教育学部の初期ゼミ開講年度以来、9年ぶりのことです。当時は、開講目的や実施要領等手探り状態であったことを記憶しております。今回、教員向けの「レポート初心者の指導法」および参考書(知へのステップ)がたいへん役立ちました。全学共通教育科目に変更後、大学教育総合センターによる全学的取り組みの成果の一端を実感できた思いです。上述の中教審答申では、「高校段階から大学段階への移行の支援、学生の学習意欲向上や学習の動機付け」として初年次教育の重要性を指摘しています。まさに基礎ゼミの趣旨がこれに合致します。基礎ゼミが充実した「学士課程教育」の先駆けとなるべく検証・改善を重ねていきたいと考えております。

部門長より



お が さ わ ら よ し た か
小笠原 義文

学生生活支援部門長
(教授 教育学部専任担当)

今年も昨年に引き続き、学生議会等関係者と協働で、新学期早々に駐輪マナーを身に付けてもらう意図から駐輪指導を行いました。月日が経つにつれて「自転車駐輪場」「バイク・原付駐輪場」の立看板があるにも拘わらず、駐輪禁止場所に駐輪したり、バイク・原付が排気音を響かせ構内へ違法進入して駐輪するなど、学生の交通マナー低下が気に掛かります。キャンパス内で自転車等の駐輪の乱雑は、学内景観の悪化にもなり通行障害ともなります。

中央食堂北側通路は、教育学部校舍改修による工事車両の通行も多く、救急車両の進入も想定されるため通路にはみ出して駐輪することは危険が伴います。再三の警告にも拘わらず、違法駐輪するため「告この場所は、駐輪場所ではありません。近くの駐輪場へ駐輪して下さい。通行に支障をきたすとともに、事故の危険性もあるので、駐めてある自転車は撤去します。学務部 学生支援課」と掲示し、駐輪違反の自転車にチェーンを掛け移動させないようにしてから当該学生に注意を促しています。盛岡東警察署から「大学構内や学生寮駐輪場での無施錠の自転車盗難が多く、管内における被害が多発しているので学生に注意して欲しい」旨の要望書が届きました。キャンパス内という安心感から無施錠で駐輪し、そのことが無断使用を誘発し盗難被害に至っているとのことです。無施錠の自転車を乗り回した後、放置されて窃盗事件となっていることから「自転車盗難続発 二重ロックを。必ず施錠し、自分で防備して下さい」という看板を各駐輪場に掲示して自転車の「施錠の習慣化」を喚起し安心・安全な環境の整備に務めています。

上田地区の広い敷地に位置する大学構内は、樹木の配置も整備されて緑が濃く、すばらしい環境にあることを嬉しく思います。学内景観の向上を目指して、自転車及びバイク・原付が整然と駐輪されて、事件・事故のないキャンパスとなるよう学生のモラル向上を図って行きたいと思います。



は し も と り ょ う じ
橋本 良二

キャリア支援部門長
(教授 農学部専任担当)

これまではレールが敷かれ、行き先も見えていました。小、中、高の学校を経て大学に進んできた学生たちのことです。ところが、大学に入ると、そこから先はそのようなレールはありません。それぞれ不安に感じ戸惑いながら先に進むことになります。

10月29日、キャリア支援課主催で、3年生を対象に「自己PR講座」を開催しました。講師は就職情報企業の若い女性の方で、主に「エントリーシート」の説明と書き方について助言をいただきました。講座は当日2回に分けて実施され、百数十名の学生が参加しました。そばで見ていて、普段の授業とはちがった熱心さが伝わってきました。就職のための書類と言え、昔から「履歴書」と相場が決まっていたのですが、ネット社会になり、「エントリーシート(ES)」をよく耳にするようになりました。私自身よくわかっていませんでしたので、今回、学生たちといっしょにレクチャーを受けました。

履歴書は、もちろん今でも就職先はどこであれ提出することになっており、その重要性は昔と変わっていません。履歴書は社会共通のフォーマットであるのに対して、ESは企業等独自のフォーマットになっており、そこでは履歴書には表れてこない、つまり「あなた自身をもっとわかりやすく詳しく知らせてください」に対する記述が求められます。各企業さまごまですが、やはり共通部分があり、(1)自己PR、(2)志望動機、(3)将来展望を要求しています。企業は、ESを、(1)説明会参加の選考、(2)一次選考や二次選考の足きり、(3)面接材料に使うとのことです。講座では、実際にESを書き上げるところまでやってみました。

企業のトップリーダーは、リクルーティングでしばしば明言を吐露します。「縦軸である基礎学力と横軸である人間力、どちらに弱点があっても成果は望めない」などと。でも、学生たちにとっては、それはそれ。今は、選考通過のためのESをどう書くかのようです。ESを前に、委縮するような彼らであってほしくはありません。「大学でのキャリア教育」のポイントを一つ理解して、研究室にもどりました。

運営委員会

センター長 玉 真之介

■自己点検評価の実施

平成16年の法人化と共に設置された大学教育総合センターは、今年度で6年目を迎えます。この間、様々な課題への対応に追われてきましたが、法人第一期を振り返り、第二期への指針を得るために、自己点検評価の実施を今年度の最重要課題に定めました。

4月の運営委員会では、「点検評価の指針(案)」を示し、点検評価の方法と実施組織、外部評価、およびそのスケジュールについて諮りました。この「指針(案)」に基づいて、5月の運営委員会で「点検評価小委員会」を設置し、6月に第1回の点検評価小委員会を開催して、点検評価作業を開始しました。また、8月には第2回小委員会を開催して、外部評価委員候補者を決定し、さらに「全学共通教育に関する教員アンケート」の実施も決定しています。

外部評価委員は、弘前大学、秋田大学、岩手県立大学の理事・副学長、東北大学の高等教育開発研究センター副所長、そして学内の地域連携推進センター長、国際交流センター長に依頼しました。現在は、部門ごとに取組評価シートをとりまとめています。引き続き部門ごとの評価を行い、最後にセンターの自己評価を行った後、12月末には外部評価委員会を開催する予定です。

■その他の課題

5月の運営委員会では、昨年度に設置した副専攻制度研究会から5つの大学に対する視察調査を踏まえた「ESD副専攻制度の導入について」と題した答申がありました。今後、この答申を踏まえた具体化が第二期の課題となります。

6月の運営委員会では、環境省「環境人材育成のための大学教育プログラム開発事業」に採択された「ISO 14001と産学官民連携を活用した『π字型』環境人材育成プログラム」の実施に向けてプロジェクト推進教員の公募と選考委員会の設置を決めています。

7月の運営委員会では、例年より早く入学前教育小委員会を設置しました。その際、高校生の負担や高校側の理解について懸念する意見を踏まえ、高校に対しアンケート調査を実施することとなりました。

8月の運営委員会では、2年越しの懸案であった「初年次自由ゼミナール」について、担当教員の公募が報告されています。また、教員養成機構の活動が学部十分に伝わっていないという意見を踏まえて、機構長に出席してもらって教員養成機構の活動報告もなされています。

■テレビを消して読書する共同行動

岩手県内の幼稚園から大学までが連携してCO₂の削減と読書に取り組む「テレビ・ゲーム・パソコンを消して読書する共同行動2009」が5月の運営委員会で議題に取り上げられ、全学的な実施が確認されました。6月5日までの1週間を「環境ウィーク」として宣伝にも取り組みましたが、結果は思わしくなく、友情参加の大阪工業大学を下回るものでした。今年度は、すべてが手探りでしたので、徹底できないところもありました。来年度は、基礎ゼミナールや教養科目での協力を得て、ぜひ今年度を大きく上回る結果を得たいと考えています。

■入学前教育に関するアンケート

AO・推薦合格者がいる高等学校106校に対して、本学の入学前教育が、①生徒に加重負担となっていないか、②高校の指導の妨げになっていないか、の2点についてアンケート調査を実施しました。その結果、65校から回答があり(回収率61.3%)、負担についても、指導についても全く問題ないことが確認でき、それ以上に、多くの高等学校から、この取組に対する感謝と支持、さらに評価をいただくことができました。



環境人材育成プロジェクト

環境人材育成プロジェクト推進教員 中島 清隆／委員長 玉 真之介

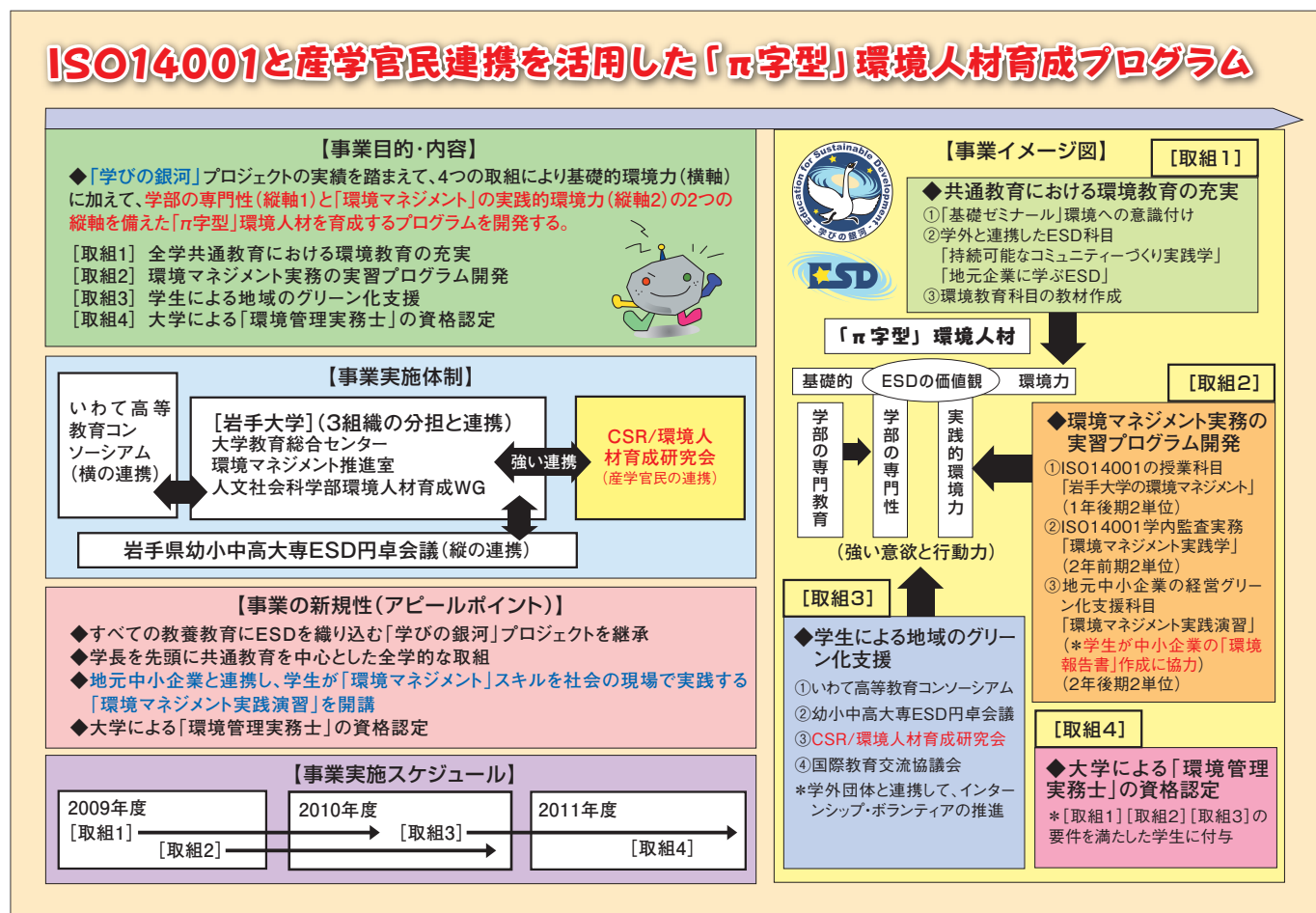
■環境人材育成プロジェクトのご紹介

本学では、今年度から、環境省で採択された「平成21年度環境人材育成のためのプログラム開発事業」として『ISO14001と産学官民連携を活用した「π字型」環境人材育成プログラム』を始めました。このプログラムは、2008年度末に終了した、文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」（現代GP）採択事業『持続可能な社会のための教養教育の再構築「学びの銀河」プロジェクト』を発展継承させるものです。

当プログラムでは、「学びの銀河」で育成した「T字型人間」の基盤の上に、基礎的環境力（横軸）の充実に加え、個々の学部における専門分野（縦軸1）のほかに、「環境マネジメント」の実践的環境力（縦軸2）を備えた「π字型」環境人材の育成を目指しています。

本年10月からは、実践的環境力の育成科目として、「岩手大学の環境マネジメント」が始まります。また、環境教育科目の教材作成や来年度開講予定のISO14001学内監査実務科目「環境マネジメント実践学」についても準備が進められています。さらに、「環境マネジメント実践演習」の準備の一環として、岩手県中小企業家同友会にご協力いただき、地元中小企業における環境報告書作成の実態調査も行われています。

下図で示した〔取組1〕から〔取組3〕の要件を満たした学生には、本学が「環境管理実務士」の資格を認定、付与します〔取組4〕。岩手大学は、ESDの価値観に基づき、学部の専門性に加え、基礎と実践の環境力を兼ね備えた「π字型」環境人材の育成を、関係各位のご支援を賜りながら全学的に進めていきます。



専任教員 永野 拓矢

■はじめに

大学教育総合センター内に入試部門が設置され4年目を迎えました。部門業務のひとつである「高校訪問の重要性」の認識が学内に浸透し、入試部門の専任教員ほか学部教員(入試・広報委員)が中心になって地元岩手県や東北地方はもとより、遠くは北海道や関東以西にも積極的な訪問展開をしています。その甲斐あって今年度入試の志願者(一般入試)は大幅に増加し、3,413名(382名増)となりました。

■定着した岩手大学「主催」説明会

本学入学者の出身地別割合(09年)は地元岩手から約44%、東北全体では85%超と地域密着型の大学として認知されています。それ故に高校生対象の業者主催の大学説明会・相談会では会場によって相談者が本学ブースに集中することで教員個々の対応が困難になり、満足度の低下が懸念されていました。

「もっと相談者に満足いく説明会を」の要望に応えるべく発足したのが本学主催の大学説明会です。「(業者に頼らず)“岩手大学の全て”を自らが伝える」ことを第一義として、入試部門と入試課がひとつの組織として運営しています。3年目の開催となった今年も県内および県外近郊拠点都市(青森、八戸、仙台)に6~7月の土日に集中的に開催し、7会場で500名程度の来場がありました。

当説明会は「前半パート(パワーポイント使用の概要説明:40分)」と「後半パート(教職員による個別対応:終了まで)」に分割して行うことが大きな特長です。「岩手大学には関心あるけど何を聞いたらいいのかわからなかったので前半部の全体説明は大変役に立った」等、保護者や低学年の参加者にも「前半パート」は毎年評価を受けています(アンケートより)。また、当説明会の趣旨を理解された私立岩手医科大学も昨年より一部の会場で共催しています。

昨年に比べ、総入場者数は減少(約80名)していま

すが、「後半パート」の学部ブースへの質問者数は昨年とほぼ同じであり、より本学を真剣に考えている受験生や高校生の参加があったと考えられます。

また、今年はこの主催説明会を発展させる取り組みとして「(直接)高校での岩大説明会」を青森県と秋田県の2高校で実施しました。過密化しつつある学校行事による日程のバッティングや過剰傾向にある業者主催の大学説明会への食傷感から参加を控える高校も増加しています。

本学ではそうした高校の事情に鑑み、本学への進学数が多い高校に全学部の教員とともに出前講義をプラスした新しいタイプの大学説明会・相談会を実施しました。東北地方の進学校では夏休みが短い上に連日の夏期補習などでオープンキャンパスも参加困難な場合があります。こうしたニーズに即応することで本学への関心を維持、あるいは高めていただくことを狙いとして企図しています。



■高校訪問にもひと工夫

入試部門としては専任教員自らが年間数百校の高校訪問を行っています。今年は本学への意識をより高める方策として、訪問前に高校に説明会開催の相談を申し入れ、可能であれば講演形式の説明会を実施しています。今年上半期で県内外7高校にて実施しまし



た。岩手大学の案内に限らず、「大学受験の心構え」など多方面に展開しています。高校からの信頼が第一であることを常に意識し、今後も全国的な展開を目指して行きたいと考えています。

高校からの信頼が第一であることを常に意識し、今後も全国的な展開を目指して行きたいと考えています。

■新規分科会代表から一言

「健康・スポーツ」分科会代表

鎌田 安久（教授 教育学部専任担当）



学生時代の心身における行動体力の向上こそが、社会人となって活躍するときのバイタリティーや健康の源になりますし、また、学生時代にスポーツ文化への造詣を深めることで、スポーツに親しむ機会も増え生涯の心身の健康につながることから、これからも、「健康・スポーツ」の教育を通して学生の育成に貢献できればと考えています。

「思想と文化」分科会代表

武田 京子（教授 教育学部専任担当）



昨年度までは、名簿に名前を連ねているだけでしたので、代表として半年を経た今でもまだ当面の課題を解決するだけであります。共通教育の見直しやFD活動などへの取り組みには未だ到達できない状態です。19年度の再編によって、構成メンバーの人数が適正化されたとはいえ、全員と顔を合わせる機会を作るのが難しい状況ですが、メール等を駆使して、分科会の使命を果たすよう努力していきたいと考えております。よろしくお願いいたします。

「生物の世界」分科会代表

橋爪 一善（教授 農学部専任担当）



「いのち」は多様であり、教養の生物学を担当する「生物の世界」分科会は、生命科学現象学習への導入とその基礎的な理解についての学習を支援する部門です。生命現象は複雑ですが、その基礎的な仕組みについて俯瞰することから、ヒト自らや地球に暮らす生物について、生体（および生態）機能の不可思議を考えて貰うことが肝要です。所属する教員は63名、多くは農学部

の所属ですが、人文社会科学部および工学部の教員から構成されており、「いのち」と「生き物」について多角的な教育内容が提供できるようにしたいと思います。

「自然と数理の世界」分科会代表

三浦 康秀（教授 人文社会科学部専任担当）



分科会メンバーの退職に伴う開講コマ数の減少への対応策もあり、何とか新たな科目が立ち上げられないか、皆様と目下検討中です。

さて、先日京都大学主催の学士課程における科学教育に関するFDシンポジウムに参加してきました。ノーベル物理学賞受賞者ワイマン氏（UBC）の「21世紀の科学教育～科学のツールを用いて科学を教える」という基調講演では、ネットワークとコミュニティを形成し、シミュレーション実験のサイトを用いた実践例が紹介されました。日本からのパネリストも加わり、科学教育で文系・理系向けを問わず、知識だけでなく思考力をいかに高めるかについて活発に討論され、大変参考になりました。自分の授業では思考力養成に常に心がけるようにしているのですが、「今日の授業で何を覚えれば良かったですか」とあるレスポンスカードに出くわすことがあり落胆させられています。

「科学技術」分科会代表

山口 明（准教授 工学部専任担当）



「科学技術」分科会の代表になりました。学問の対象として見てしまうと「科学技術」は遠い物と感じる人もいられるかもしれませんが。しかし我々の生活の中に科学技術は広く深く浸透して来ています。より良い暮らし・生き方をする上で、科学技術の知識の重要性は益々高まっています。一方で、「科学技術」らしさを前面に出しながら、実はまやかしだったりする物もあります。その見極めをする力も必要になって来ています。学問としてはもちろん、その一助となるような講義が提供できればと考えています。

部門長 佐藤 瀏

■初年次自由ゼミナールの新設

本学における転換教育科目はこれまで、「基礎ゼミナール」1科目でした。転換教育科目としてはいささか不十分で、その拡充が求められておりました。大学教育総合センターでは、転換教育の更なる充実を図る目的で、新たに1年次後期科目として「発展ゼミ」(仮)の開講を提案してきました。「発展ゼミ」(仮)に関してその目的や意義、さらには実施の方法などについて十分に時間をかけ、各学部の要望にも応えるように検討を重ねてきました。このたびようやく、科目名を「初年次自由ゼミナール」として開講することが全学的に了承され、22年度後期に開設することになりました。この科目の担当教員の公募を実施しており、これまでにすでに6名の方に応募していただいております。

■「初年次自由ゼミナール」の概要

- ・開講科目名：
初年次自由ゼミナール（転換教育 科目）、
自由選択 1単位
- ・授業の目的：
学生同士および教員との討論を通して、幅広い学びの意義を確認することを主たる目的とします
- ・科目内容：
テーマに沿った課題に取り組むゼミ形式授業
- ・開講曜日および時間：
後期、月曜日もしくは水曜日、9-10校時
- ・授業形式：
ゼミ形式授業（受講者数は1科目あたり20名程度をめぐり人数制限をする）

この新たに開講される「初年次自由ゼミナール」の受講が、本学の学生の学びの重要な転換点となると期待されます。

■第59回東北・北海道地区一般教育研究会の実施

9月3日—4日の2日間、本学工学部テクノホールを主会場に「第59回東北・北海道地区一般教育研究会」は本学が当番大学として実施されました。参加者はおよそ55大学から114名で、基調講演、3つの分科会における事例報告、および全体会における事例報告、情報交換会が次のように行われました。

1. 全体会 基調講演：
大阪大学大学院人間科学研究科
平沢 安政 教授
「キー・コンピテンシー」が学士力に示唆するもの
2. 分科会
 - ・第一分科会「授業の質を高める努力」
事例報告5件
 - ・第二分科会「授業改善を目指す組織的取組」
事例報告5件
 - ・第三分科会「初年次教育における授業の工夫」
事例報告5件
3. 全体会事例報告
 - ・「大学間連携の時代とESD」
—北欧の取り組みにも触れて—
岩手大学 理事・副学長、大学教育総合センター
玉 真之介 センター長
フィンランド
オーボアカデミー大学、生涯教育センター
ポーラ リンドローズ 所長
4. 情報交換会：参加者 74名

基調講演はもちろん各分科会でも今後の大学教育の方向性を示唆する有益な討論が行われました。また、全体会事例報告では、フィンランドの取り組みが紹介され参加者との間で活発に意見が交換されました。

平成21年度 FD担当者名簿

全学共通教育企画・実施部門長		佐藤 瀏
分科会からの代表	外国語分科会	川 本 榮三郎
	健康・スポーツ分科会	浅 沼 道 成
	情報基礎分科会	鈴 木 正 幸
	思想と文化分科会	安 井 も ゆ る
	心と表象分科会	松 岡 和 生
	公共社会分科会	塚 本 善 弘
	現代の諸問題分科会	塚 野 弘 明
	生物の世界分科会	堤 賢 一
	自然と数理の世界分科会	中 嶋 文 雄
	科学技術分科会	笠 場 孝 一
	環境分科会	梶 原 昌 五

専任教員 江本 理恵

■全学共通教育授業公開

平成21年6月8日～6月12日の間、全学共通教育のすべての授業を公開する「授業公開」を行いました。

期間中、授業モニターにご登録いただいた保護者の方々を含め20名を超える市民の方々にご来校いただき、大学の授業に対する率直なご意見をお伺いすることができました。例えば、「ただ学生が10名ほどおくれて入ってくる態度が気になりました。私語も多かったです。」「教室は結構埋まっていますが、後ろの方では特に堂々と寝てる人がいました。」など、学生の受講態度を指摘する意見、学生の幼さを指摘する意見をいただきました。と同時に、「テキスト内容から発展して、早池峯神楽や歌舞伎などの説明があり、大変興味深い授業でした。」「分かりやすい講義だと思いました。次回の内容も、おもしろそうです。」「やはり少人数のゼミだけあり、かなり厳しい空気を感じました。しかし、厳しいだけでなく、とても優しい雰囲気も伝わりこちらも有意義でした。」など、大学ならではの授業を評価いただく意見も多くいただきました。

今後も、市民・保護者対象の「授業公開」を続けていきますので、全学共通教育をご担当の先生方には、ご理解・ご協力をお願いします。

■FD合宿研修会

平成21年8月20日、21日の1泊2日で、恒例のFD合宿研修会を行いました。今年は、いわて高等教育コンソーシアムの取り組みの一環として、岩手医科大学の佐藤洋一先生に講師としてご参画いただくとともに、岩手医科大学、盛岡大学から3名の参加者をお迎えしての研修会となりました。今年は、「学士力の育成と問題解決型授業の導入」というテーマを掲げ、医学教育等で実施されている「PBL(Problem / Project Based Learning)」と岩手大学を卒業するすべての学生に身につけさせるべき「学士力」に関するプログラムを用意しました。

1日目の話題提供I・II、プログラムI・IIは「PBL」をテーマとし、佐藤先生より「PBLを大学教育に導入する意義」「導入教育・専門教育でのPBLの具体例紹介」というテーマで話題提供をいただきました。その話題提供にあわせてプログラムI、プログラムIIでは、現在の教

育現場が抱えている問題点の抽出と、その解決策の1つとして、医学教育で実施されているPBLの考え方を利用できないか、という観点での話し合いが行われました。

2日目は、中教審答申等で提起されている「学士力」について、文献を読み、「岩手大学ではどのような『学士力』を学生につけさせるのか」「それをどう育成するのか」「どう評価するのか」といった観点での話し合いが行われました。

■アンケート集計結果(一部抜粋)

今回の研修会の各プログラムについて、5段階で評価してください。

話題提供I 「PBLを大学教育に導入する意義」

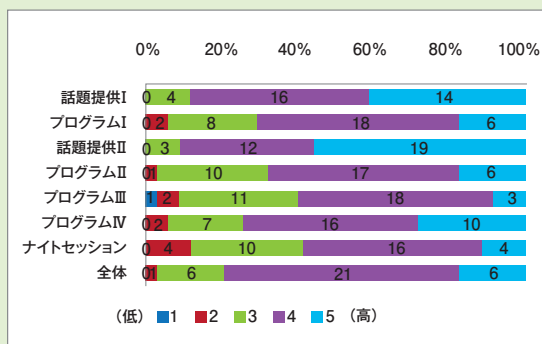
プログラムI 「現在行われている授業の問題点を考える」

話題提供II 「導入教育・専門教育でのPBLの具体例紹介」

プログラムII 「PBLを取り入れた解決方策を考える」

プログラムIII 「中教審答申に示されている『学士力』を学ぶ」

プログラムIV 「学生に身につけさせる『学士力』を考える」



■学生による授業アンケート

教育評価・改善部門では、前後期に開講されるすべての全学共通教育科目を対象として、学生による「授業アンケート」を実施しています。授業アンケートの結果は、個々の授業担当教員に返却する他、部門会議で議論した基準にしたがって「全学共通教育優秀授業科目」を

選出しています。

平成20年度後期の優秀授業科目は以下の通りです。6月17日に、大塚副学長をお迎えして、全学共通教育優秀授業科目の表彰授与と優秀授業科目担当教員と理事との懇談会を行いました。

平成20年度後期 学生による授業アンケートに基づく全学共通教育優秀授業科目 一覧

■人間と文化

0002	心の理解／適応の理解	山 口 浩
0003	心の理解／適応の理解	佐 藤 正 恵
0004	倫理学の世界	小 林 睦

■人間と社会

0049	多文化コミュニケーションB	松 岡 洋 子
0037	社会的人間論	塚 本 善 弘

■人間と自然

0060	宇宙のしくみ	山 内 茂 雄
0063	自然と法則	八 木 一 正

■総合科目

0068	これからの健康科学	澤 村 省 逸
------	-----------	---------

■環境教育科目

0083	動物と環境	青 井 俊 樹
0075	生活と環境	菅 原 悦 子

■外国語科目(英語)

0326	英語コミュニケーションⅡ(中級)	Sayers Arthur Lowell
0329	英語コミュニケーションⅡ(初級)	Blair Benjamin Reed
0313	英語コミュニケーションⅡ(上級)	Gavin Young
0314	英語コミュニケーションⅡ(中級)	Blair Benjamin Reed
0327	英語コミュニケーションⅡ(中級)	ASANO ROBERT KEN
0316	英語コミュニケーションⅡ(初級)	Sayers Arthur Lowell
0323	英語コミュニケーションⅡ(上級)	Gavin Young
0318	英語総合Ⅱ(上級)	佐 藤 智 子
0369	英語コミュニケーションⅡ(中級)	Blair Benjamin Reed
0310	英語コミュニケーションⅠ(中級)	Gavin Young
0324	英語コミュニケーションⅡ(上級)	Hareyama James Franciscus
0342	英語コミュニケーションⅠ(上級)	Sayers Arthur Lowell

0309	英語コミュニケーションⅠ(上級)	Mark de Boer
------	------------------	--------------

0317	英語総合Ⅱ(上級)	伊 東 栄志郎
------	-----------	---------

■外国語科目(英語以外)

0476	上級日本語E	松 岡 洋 子
0446	中級フランス語	中 里 まき子
0425	初級フランス語(入門)	加 藤 隆
0445	中級フランス語	グラ アレクサンドル
0470	初級韓国語(発展)	崔 在 繕
0468	初級韓国語(発展)	齊 藤 春 佳

■健康・スポーツ科目

01034	体力トレーニング	佐々木 優 次
01031	ニュースポーツ	小笠原 義 文
01035	バドミントン	阿 部 匡 利
01067	バレーボール	阿 部 令 奈
01032	ラケットスポーツ	浅 沼 道 成



平成21年6月17日 全学共通教育科目優秀授業表彰状授与式にて

大学設置基準の一部改正:一部抜粋 (平成20年4月より施行)

○成績評価基準等の明示等(第25条の2関係)

大学は、学生に対して、授業の方法及び内容並びに一年間の授業の計画をあらかじめ明示するものとする。また、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行うものとする。

○教育内容等の改善のための組織的研修等(第25条の3関係)

大学は、授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。

部門長 村上 祐

■専門基礎教育の担当体制について

本年4月に人文社会科学部の物理学担当教員が転出したため、その教員が担当していた農学部・工学部の「専門基礎科目(物理学分野)」については、急遽、大学教育総合センター予算(学長裁量経費)による非常勤講師採用で対応することとしました。しかし、本部門では、この非常勤講師採用はあくまでも緊急避難的なものであり、「専門基礎科目」の維持・充実のためには「物理学担当専任教員(人文社会科学部)」の早期補充が必要であるという結論に達し、同趣旨の要望書を玉岩手大学理事・大学教育総合センター長宛提出しました。

また、今回のような複数学部に関わる専門基礎科目の非常勤講師の資格審査を本部門で行うこととし、資格審査・手続きに関する申し合わせを作成しました。

なお、人文社会科学部教員と工学部・農学部教員による、来年度(2010年度)の開講についての協議が科目別・学部別に開かれ(部門長もできるだけ陪席しました)、開講コマ数および担当教員等はほぼ今年度と同様に決まりました。2011年度以降については、専門基礎科目の充実へ向けて今後部門会議で検討していくことになります。協議の席上、農学部から「クラスサイズが講義に与える影響」という調査の概略が紹介されました。それによると、クラスサイズ(受講者数)は、「教育の授業方法」の指標に対し、統計学的に有意な負の相関を示したとのこと。基礎科学関連の専任教員が少なくなっている現状では、開講コマ数を減らさざるを得ず、それがクラスサイズの拡大に繋がっているという事情があります。このことも踏まえて、今後の専門基礎教育を考えていく必要があります。

■新生の習熟度アンケートの実施について

理系基礎科目の習熟度を測るため、工学部と農学部の新生全員を対象に、数学・物理・化学のアンケート調査を実施しました。集計結果を部門会議の資料とするとともに、専門基礎科目担当教員に配布しました。学部や入試形態、および入試科目であったかどうかによって正答率にやや大きな差がありました。データの利用法については学部および専門基礎担当教員に任せること

になりましたが、少なくとも来年度はこの3科目で今年度と同様に継続することとしました。

■理系基礎支援講座の拡充について

平成18年度の後期から高校教員の協力を得て始めた高校程度の補習授業「理系基礎支援講座」(数学・物理学・化学)に、今年度から本学名誉教授が加わり、開講コマ数を増やしました。昨年より物理学の受講生が増加したという報告がありました。

兼務教員から抱負をいただきましたので掲載します。(今回は、教育学部と農学部の兼務教員による抱負です。)

■犬塚博彦先生(教育学部専任担当)

委員のお仕事をお引き受けするのは今年で2年目になります。以前は専任として身をおく学部の側からの視点で大学のことを考えるという形が多かったのですが、部門会議の中ではそれとは別に、全学の視点でものを考え判断をするという場面が多く、それがまたそれぞれの学部が置かれている状況についての理解を深めることにもなり、いろいろな学びの機会とさせていただいております。微力ながらも何らかの形でお役に立つことができればと思っております。

■嶋田尚哉先生(農学部専任担当)

兼務教員を拝命し、初仕事が専門基礎科目の非常勤講師の選考でした。専門基礎科目は各学部の専門教育への基礎を固め、導入と橋渡しをする重要な機能を果たす科目でありながら、制度上の不備が生じているようです。全学的な定員削減による教員の減少により、専門基礎教育の担当者は減ってゆくばかりです。入学してくる学生の基礎学力の低下が指摘されるなか、専門基礎科目の充実は緊急で重要な課題であることはいうまでもありません。非常勤講師に頼り科目数の維持に汲々とする状況を改め、実効性のある制度や体制作りを大学教育総合センターに期待しております。

部門長 小笠原 義文

■上田寮改修計画の進捗状況

老朽化が進んでいる上田地区学生寮の改修の基本的方針について、①内部改装に留める予定だった自啓寮についても大型改修に変更、②女子向け居室増加は、今回は見送り将来の検討課題にする、③入居期間は原則2年間とするが、自啓寮は、2人部屋のインセンティブとして現状と同じ4年（最短修業年限）とする、の改訂案を策定し、この改訂案と改修基本平面図をもとに、全寮生に対して上田寮改修説明会を開催しました。外部資金（長期借入金）による改修となり、返済は寄宿料収入を充てることから、改修後の入寮生からは、寄宿料を値上げせざるを得ないことについても、概ね寮生の了解を得ました。今後は、長期借入金の認可及び具体的な設計・工事に向けて、寮生の合意を得ながら準備を進めていくことになります。

また、改修後は入居定員数が減少することから、岩手大学学生寮として適切な入寮定員数をどこに設定するか、継続して審議することにしています。

■自転車・バイク及び原付の駐輪指導を実施

構内環境改善及び交通ルール周知の観点から、特に新生が大学生活を始めて間もない4月20日～24日までの期間に、交通・駐輪指導を実施しました。学生生活支援部門委員と学生議会運営委員会委員、学生支援課の三者が協働で中央食堂前及び館坂門付近を重点に行いました。指定駐輪場以外への駐車や通路への駐車は、緊急車両入構の際の妨げになる可能性があります。バイク及び原付についても、構内に進入することの違反性や危険性を説明し、正門及び館坂門を入ってすぐ左側のバイク用駐輪場への駐輪に協力してもらうよう、今後も粘り強く指導していきます。

■岩手大学がんちゃん奨学資金制度の変更

一時的な経済的理由により生活が困難な学生に対し、生活費に充てる資金を貸与することを目的として設けられた「岩手大学がんちゃん奨学資金」制度ですが、

平成17年10月制定以来、これまで、概ね50人の利用者があり、一定の役割を果たしてきました。しかし、ここ数年、生活費としてではなく留学資金としての貸与希望や、1人10万円の上限額では不足する学生が目立ってきたことから、①貸与目的に「自己研鑽に充てる資金」を追加する、②貸与上限額は、原則として1人10万円とするが、これによりがたい場合は岩手大学がんちゃん奨学資金貸与選考部会において貸与額を決定する、の2点を盛り込むこととしました。

■ガンチョンタイムを学生議会運営委員会が運営

ランチをとりながらフランクな雰囲気の中で学生と職員とのコミュニケーションを図る『ガンチョンタイム』。学生からの要求交渉を行う場ではなく、毎回一つのテーマを設定し、学生と一緒にもっと岩手大学を良くして行く方策を語り合う場として、平成17年10月からスタートし、平成21年7月で25回目を迎えました。これまで取り上げられたテーマは「学内全面禁煙」「五月病について」「英語を楽しく学ぶ方法」「キャンパス改善計画」・・・etc.

今年度は、第23回の「学長と語ろう!」を皮切りに、第24回からは、本学の学生が組織する委員会のひとつ「学生議会運営委員会」が運営を担当し、学生が設定したテーマ「あなたの自転車は大丈夫?」「心の声を聞いてもらえる場所探し」で開催しました。今後も学生視点でのテーマで、活発な意見が交わされ、益々輝く岩手大学になっていくことを期待しています。



■前期キャリア教育実施状況

自分自身が、生きること・働くこと・学ぶこと、の意味や目的、手段を考える「キャリア教育」と社会に出て活躍するための「就職支援を含むキャリア支援」は車の両輪です。今年度の「キャリアを考える」の授業には300名を越す学生が集まり抽選で履修学生を決めるほどの関心の高さを示しました。

学生の地元定着を目指す産学官連携キャリア講座「地場産業・企業論」も2年目を迎えました。この講座は、岩手県立大学との共同開催で岩手県や岩手経済同友会と連携し、岩手県知事や地元企業経営者に講師を務めていただきました。7月18日にいわて県民情報交流センターで成果発表会を開催し、大学生や大学および地元関係者の前で約30名の学生が6グループに分かれて、講義や企業訪問を通じて学んだ地元企業の魅力や地元定着のための課題などを伝えました。参加学生の満足度が高く、マスコミからからも高い注目度を集めました。

■学生の進路状況

平成20年度(平成21年3月卒業)就職状況は、学部生・大学院生共に就職率が若干上昇。これは内定時期の関係で昨年秋からの経済情勢悪化の影響を受けなかったことによるところも大きいと思われます。

就職率 学部 20年度:96.3%(19年度:95.8%)
大学院 20年度:97.9%(19年度:97.4%)

岩手県内就職者の率も上昇しており、引き続き地元就職(岩手県及び東北出身県)への支援を継続します。公務員への合格者・内定者がここ数年増加傾向にあり、公務員講座の成果と学生の安定志向の現れと推察されます。

平成21年度(平成22年3月卒業)については世界同時不況の影響で求人件数が減少し厳しい環境となっております。中堅企業の中には優秀人材確保のチャンスとして採用意欲の高いところもありますが、学生の安定志向とのミスマッチも見られます。

■キャリアガイダンス、セミナーの実施状況

4年生については、昨年度とは一変し厳しい就職環境となり、本学への求人数も減少。これに対応するため

キャリア・アドバイザー 中村 謙一

就職巻き返し講座や企業合同説明会に合わせた就職相談会、就職ガイダンス等を複数回実施するとともに、未内定学生に対しキャリア支援課の活用呼びかけや、情報の提供に努めております。

3年生については昨年度と一変した厳しい就職環境を反映し、前期の就職ガイダンスの出席者が大幅に増加しました。特に学部別の就職ガイダンスは1000名を超える学生が参加し、昨年度同期の約2倍の参加者となりました。

■学内企業合同説明会(夏季合説)の開催

平成21年度(平成22年3月)卒業の学生を対象として9月18日に開催しました。参加企業38社(前年同期99社)、参加学生延べ120人(同149人)と景気低迷の影響で参加企業数が大幅に減少しました。その中で、企業の姿勢から①優秀人材の確保意欲高い②そのためには採用期間にとらわれない弾力的な取り組みを行う③本学を含む国公立大への期待が伺えました。

■企業訪問実施(青森 函館 札幌)

産学の相互理解と学内キャリア支援への反映を目的として教職員連携の企業訪問を実施しております。活動の効率的レベル向上のため昨年度から①訪問企業数を絞り②東北中心から首都圏にも調査ポイントを拡大して参りましたが、本年度からは入試会場を設置するなど入学者の多い南北海道地区への訪問も加えました。

■卒業、終了された方々と学長との懇談会in八戸

昨年度の盛岡市での開催に引き続き、第2回目の懇談会を八戸市で開催しました。今回は6月に発足した大学同窓会連合のご後援で、全学部より27名の卒業生に参加いただきました。大学側からは学長、理事、監事、学部長が出席し、大学の取り組み報告に引き続き懇談を行いました。卒業生からは交通の利便性向上、マスコミなどの活用による大学PR促進や地域貢献の充実について意見が寄せられました。

環境都市盛岡づくりプロジェクト

人文社会科学部 井上 博夫

エコロジカル・シティー盛岡をつくることを共通の目標に、テーマを決めて、まちを調べ、課題を発見し、解決策を考え、人々に提案し、自ら行動する。サークル活動のノリで進めよう、と授業を始めました。

まず、一人一人に「環境都市盛岡づくりプロジェクト」で取り組みたいテーマの企画書を提出・発表してもらいました。授業前の心づもりでは、少人数で一つのテーマに取り組むつもりでしたが、意外と受講者数が多く多様な企画が出てきたので、3つのテーマ、3つのグループ（①モーダルシフト、②岩手大学におけるタバコの実態調査、③食品残渣飼料を用いた循環形社会）が同時進行することになりました。

①モーダルシフト・グループ

自家用車から公共交通機関や自転車へと交通手段の転換を進めることによって、環境にやさしく、暮らしやすい盛岡をつくることをめざした企画でした。

市民団体（盛岡自転車会議）の方から話を聞いた後、自転車と公共交通の2班を編成して活動に取り組みました。自転車班は盛岡市内を実際に自転車で走って道路事情を調査し、提案書を作成して盛岡市に申し入れを行いました。公共交通班は、バス利用の促進をめざして、ダイヤの調査、バスの試乗、学生へのアンケート等に基づいてバス会社と盛岡市に申し入れを行いました。

②タバコ・グループ

昨年の4月から岩手大学ではキャンパス内全面禁煙を開始しましたが、校門付近での喫煙や吸い殻の散乱等の問題も生じていました。

そこで、キャンパス周辺を実地調査するとともに、学生アンケートに基づいて報告書をまとめ、大学教育総合センター長、保健管理センター所長に申し入れを行いました。

③食品残渣飼料(エコフィード)グループ

ゴミ減量という目標から始めましたが、議論を進める中で、多くのコンビニ弁当が手つかずのまま捨てられていることに矛盾を感じました。そこで、コンビニ本部に排出ゴミの現状を問い合わせるとともに、各地で行われているエコフィードの試みを調べたうえで、紫波町の養豚農家を訪ね、食品廃棄物→エコフィード→養豚→食品という循環の可能性を探りました。

最後に各グループが成果発表を行って授業を終えましたが、「課題科目」の名の通り、課題の発見→調査→提案・交渉→反省→発表と、学生自身の活動によって進められ、「普通」の授業とはちょっと違ったものになったのではないかと思います。



最後の授業で各グループが成果を発表



養豚農家を訪ねてエコフィードの可能性を聞く

いわて高等教育コンソーシアム

■学長会議からコンソーシアムへ

平成20年度文部科学省戦略的大学連携支援事業に「いわて高等教育コンソーシアムにおける地域の中核を担う人材育成と知の拠点形成の推進」(代表校:岩手大学)が採択された事を機に、「いわて5大学学長会議」(平成12年発足)は「いわて高等教育コンソーシアム」(以下「コンソーシアム」と略記)へと発展しました。

■コンソーシアムの活動

コンソーシアムでは、国際通用性や教育の質保証など大学を取り巻くグローバルな課題、低迷する大学進学率や県内就職率などの地域的な課題に対応するため、県内5大学の連携を強化し、地域の中核を担う人材育成を目指して、以下の事業を展開します。

コンソーシアム連携校内事業(岩手大、岩手県立大、岩手医科大、富士大、盛岡大)

*教育研究環境の基盤整備[取組1]

- ・共通キャンパス(アイーナ)の整備
- ・ICT環境の整備など、6事業

*教育力の向上[取組2]

- ・FD研修の共同実施
- ・岩手学講座の共同開講など、6事業

*知の拠点形成[取組3]

- ・東アジアとの連携強化
- ・地域文化研究の推進など、3事業

高大連携事業

*大学進学率の向上[取組4]

- ・いわて情報ハイウェイを活用した講義の配信
- ・共通キャンパスを活用した公開事業の実施など、3事業

地域貢献事業

*地域の活性化[取組5]

- ・スポーツユニオン、シニアカレッジ等の実施
- ・生涯学習の場の提供など、2事業

ここが変わる! ここが繋がる!

※アイアシスタントが、盛岡大学、富士大学、岩手医科大学に導入されます。

→ 単位互換制度で受講する他大学の学生も、アイアシスタントで繋がります。

※遠隔講義(TV会議)システムを連携大学、アイーナ、県内3高校に導入します。

→ 連携大学の学生、県内3校の高校生とテレビ会議システムで繋がります。

※平泉、賢治、言語研究などの研究をコンソーシアム規模で推進します。

→ 5大学の教員が研究テーマに応じて横断的に繋がります。

※学生の地域参加プロジェクトを実施します。

→ 5大学の学生が地域的課題に応じて横断的に繋がります。

※いわて未来づくり機構にシンクタンクとして参画します。

→ コンソーシアムが、《オールいわて》としっかり繋がります。

※岩手学講座の開設、各大学での特色ある講義の充実等を経て、「地域リーダー育成プログラム」が始動します。

→ イーハートブキャンパスからイーハートブ大学へと5大学連携が更に強化されます。

アイアシスタント&匠の技

教育評価・改善部門 江本理恵

■アイアシスタントの改修

平成17年度～平成19年度「特別教育研究経費（教育改革）」によるプロジェクトの一環として取り組んできたアイアシスタントですが、おかげさまで、履修申告機能等も実装し、学生・職員・教員で共有する総合的な基盤システムとなりつつあります。しかし、短期間で構築を進めたため、様々な点で問題があることも認識しており、予算獲得方策も含めて右のような改修項目を検討しております。

プロジェクトが終了し、予算確保方策から考えなければならない状況のため、なかなか予定通りに改修を進めることができませんが、少しずつ改善に向けて取り組んでいきます。今後もご愛用いただくとともに、改修希望項目があれば、ご意見をお寄せください。

■アクセス速度の改善

特に左側に配置されたメニューからのアクセスに時間がかかることが指摘されており、その改修作業に着手しました。

■学習支援機能（課題・レポート等）の融通性

現在は、一度出題した「課題・レポート」を修正することができませんでしたが、修正文を「追記」する機能や、メー切後にも提出可能にする「遅刻提出」機能、直接レポートを提出した学生に受け取ったことを知らせる「受理ボタン」機能を検討しています。

■成績報告書の提出等

現在、マークシートで提出している成績をアイアシスタント経由で提出できるようにする機能を検討しています。

■メッセージ機能

教員・学生・職員間でアイアシスタント内でのメールのやりとりができる「メッセージ」機能を検討しています。

『匠の技』伝承プロジェクト

教育評価・改善部門では、平成20年度の「特殊要因経費（政策課題対応経費）」、平成21年度の「特別教育研究経費（教育改革）」により、『匠の技』伝承プロジェクトに取り組んでいます。このプロジェクトは、大学教員同士で各自の授業実践に関する情報を共有し、意見交換を行い、議論するためのコミュニティを形成する仕組みを構築し、自発的、持続的に教育力向上の取り組みが行われていくことを目的としています。平成20年度には、各自の授業実践に関する情報を共有するための『匠の技』サイトを構築しました。そして、今年度は、『匠の技』サイトに収録するコンテンツ作りに取り組んでいます。



『匠の技』サイト

<https://takumi.iwate-u.ac.jp/>

岩手大学の教職員、学生であれば、このサイトにログインし、各種コンテンツの視聴ができる他、コメントを投稿したり、ポイントを付与したりすることができます。ぜひ、アクセスしてみてください。

※ログイン、パスワードはアイアシスタントと同じです。

■匠の技

「匠の技」では、岩手大学のみならず、全国の大学教員の授業の様子とその授業についてのインタビューをまとめたコンテンツを提供しています。1コンテンツあたり10分程度で視聴できます。



■授業アーカイブ

「授業アーカイブ」では、授業を収録した映像を提供しています。1コンテンツあたり80～90分程度です。また、もし、授業収録希望がありましたら、ご一報ください。



委員会及部門会議名簿

大学教育総合センター運営委員会委員名簿

(平成21年4月1日)

	氏 名	担 当 部 局 等
センター長	玉 真之介	理事(教育・学生担当)
副センター長	佐 藤 瀏	工学部
入試部門長	玉 真之介	理事(教育・学生担当)
全学共通教育企画・実施部門長	佐 藤 瀏	工学部
教育評価・改善部門長	後 藤 尚 人	人文社会科学部
専門教育関係連絡調整部門長	村 上 祐	教育学部
学生生活支援部門長	小笠原 義 文	教育学部
キャリア支援部門長	橋 本 良 二	農学部
副学部長又は評議員		人文社会科学部
	遠 藤 孝 夫	教育学部
	藤 代 博 之	工学部
	岡 田 秀 二	農学部
教務関係委員長	吉 村 泰 樹	人文社会科学部
	菅 野 文 夫	教育学部
	小 川 智	工学部
	吉 川 信 幸	農学部
学務部長	山 中 和 之	学務部

大学教育総合センター会議委員名簿

(平成21年4月1日)

	氏 名	担 当 部 局 等
センター長	玉 真之介	理事(教育・学生担当)
副センター長	佐 藤 瀏	工学部
入試部門長	玉 真之介	理事(教育・学生担当)
全学共通教育企画・実施部門長	佐 藤 瀏	工学部
教育評価・改善部門長	後 藤 尚 人	人文社会科学部
専門教育関係連絡調整部門長	村 上 祐	教育学部
学生生活支援部門長	小笠原 義 文	教育学部
キャリア支援部門長	橋 本 良 二	農学部
センター専任教員	山 崎 憲 治	大学教育総合センター
	永 野 拓 矢	大学教育総合センター
	江 本 理 恵	大学教育総合センター
	福 永 良 浩	大学教育総合センター
学務部長	山 中 和 之	学務部

委員会及部門会議名簿

■入試部門会議委員名簿

(平成21年4月1日)

	氏 名	担当部局等
部門長	玉 真之介	大学教育総合センター長
専任教員	永 野 拓 矢	大学教育総合センター
兼務教員	中 村 安 宏	人文社会科学部
	土 屋 明 広	教育学部
	西 村 文 仁	工学部
	古 濱 和 久	農学部
各学部入試委員会 (正・副委員長)	西 崎 滋	人文社会科学部
	海老澤 君 夫	人文社会科学部
	内 山 三 郎	教育学部
	境 野 直 樹	教育学部
	大 石 好 行	工学部
	平 塚 貞 人	工学部
	原 澤 亮	農学部
	武 田 純 一	農学部
	入試課長	長 代 健 児

■全学共通教育企画・実施部門会議委員名簿

(平成21年8月1日)

	氏 名	担当部局等
部門長	佐 藤 潤	工学部
専任教員	山 崎 憲 治	大学教育総合センター
兼務教員	海老澤 君 夫	外国語分科会
	鎌 田 安 久	健康・スポーツ分科会
	鈴 木 正 幸	情報基礎分科会
	武 田 京 子	思想と文化分科会
	松 岡 和 生	心と表象分科会
	丸 山 仁	公共社会分科会
	岡 崎 正 道	現代の諸問題分科会
	橋 爪 一 善	生物の世界分科会
	三 浦 康 秀	自然と数理の世界分科会
	山 口 明	科学技術分科会
	河 合 成 直	環境分科会
	宮 本 ともみ	人文社会科学部
各学部教務委員会	菊 地 洋 一	教育学部
	出 戸 秀 明	工学部
	河 合 成 直	農学部
学務課長	今 野 悟	学務部

■教育評価・改善部門会議委員名簿

(平成21年4月1日)

	氏 名	担当部局等
部門長	後 藤 尚 人	人文社会科学部
全学共通教育企画・実施部門長	佐 藤 潤	工学部
専任教員	江 本 理 恵	大学教育総合センター
	福 永 良 浩	大学教育総合センター
兼務教員 (学部選出委員)	西 牧 正 義	人文社会科学部
	五 味 壮 平	人文社会科学部
	川 口 明 子	教育学部
	武 井 隆 明	教育学部
	鈴 木 正 幸	工学部
	山 口 明	工学部
	橋 爪 力	農学部
	柴 崎 茂 光	農学部
	学務課長	今 野 悟

■専門教育関係連絡調整部門会議委員名簿

(平成21年4月1日)

	氏 名	担当部局等
部門長	村 上 祐	教育学部
専任教員	山 崎 憲 治	大学教育総合センター
兼務教員 (各学部教務委員会選出教員)	大 西 良 博	人文社会科学部
	犬 塚 博 彦	教育学部
	小 川 智	工学部
	颯 田 尚 哉	農学部
学務課長	今 野 悟	学務部

■学生生活支援部門会議委員名簿

(平成21年4月1日)

	氏 名	担当部局等
部門長	小笠原 義 文	教育学部
兼務教員 (各学部学生委員会選出教員)	白 倉 孝 行	人文社会科学部
	清 水 茂 幸	教育学部
	南 正 昭	工学部
	柴 城 幹 典	農学部
学部選出教員	能 登 恵 一	人文社会科学部
	名古屋 恒 彦	教育学部
	一ノ瀬 充 行	工学部
	喜 多 一 美	農学部
学生支援課長	白 崎 隆 典	学務部

■キャリア支援部門会議委員名簿

(平成21年4月1日)

	氏 名	担当部局等
部門長	橋 本 良 二	農学部
兼務教員 (各学部就職委員会選出教員)	松 岡 勝 実	人文社会科学部
	大河原 清	教育学部
	小 川 智	工学部
	三 輪 弼	農学部
キャリア支援課長	大 内 正	学務部

全学共通教育の理念

岩手大学は、各学部が行う専門教育とならんで、所属する学部にかかわらず全学生が共通に受けるべき教育として全学共通教育を設け、「基礎的な知識の習得を求め、多様な領域に対する学問的関心を喚起するとともに、幅広く深い教養と総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する」ことをその理念としています。

この理念を実現するために、全学共通教育は岩手大学の全ての教職員の関心・責任・協力のもとに実施されています。

| 編 | 集 | 後 | 記 |

9月に調査のためフランスに行ってきました。ヨーロッパの大学の歴史のある建物は「憧れの存在」なのですが、大学の中では「便座のないトイレ」にも出会いました。また、車いす対応で広いトイレは必ずあるのですが、絶対数は少ないのです。おまけに、私が座ると足が地に着かない(笑)。

やっぱり日本はいい国だと再認識しました。



工房うさぎごや

erudio11

[2009年12月10日発行]



国立大学法人 岩手大学 大学教育総合センター

Iwate University : University Education Center

〒020-8550 岩手県盛岡市上田3丁目18-34

【入試部門】	tel.019-621-6926
【全学共通教育企画・実施部門】	tel.019-621-6925
【教育評価・改善部門】	tel.019-621-6924
【専門教育関係連絡調整部門】	tel.019-621-6925
【学生生活支援部門(学生支援課)】	tel.019-621-6058
【キャリア支援部門(キャリア支援課)】	tel.019-621-6059

【部門共通】fax.019-621-6928

電子メール uec@iwate-u.ac.jp

Webサイト <http://uec.iwate-u.ac.jp/>



がんちゃん

